

琉球大学学術リポジトリ

島嶼環境に適応したイリオモテヤマネコの生態的可塑性：多様な食性と柔軟な環境利用様式

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム 公開日: 2007-10-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 伸一, Watanabe, Shinichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2191

島嶼環境に適応したイリオモテヤマネコの生態的可塑性
～多様な食性と柔軟な環境利用様式～

渡辺伸一（琉球大学理工学研究科）

ベンガルヤマネコ *Prionailurus bengalensis* は、アジアでは最も分布域の広い、小型のネコ科動物である。琉球列島の最西南端に位置する西表島には、その亜種であるイリオモテヤマネコ *P. b. iriomotensis* が生息する。ベンガルヤマネコの分布域には、大小数千の島々が存在するが、その中で西表島 (284 km²) は最も狭いネコ科の生息地である。また、一般に小型ネコ科の主要な餌である齧歯類などの小型哺乳類が、西表島には本来生息しておらず、そうした餌環境で生息する野生ネコ科もほかにない。本研究では、このように野生ネコ科の生息地としては最も制限された環境だと考えられる西表島で、ヤマネコの生態的特徴、とくにその食性と環境利用について明らかにし、ベンガルヤマネコが潜在的にもつ生態的可塑性について考察した。

ヤマネコの食性について、島内の様々な環境から採集したヤマネコの糞 947 個の内容物分析から、餌種の構成の季節・地域的变化について調査した。また、総延長 242 km のセンサスの結果から主要な餌種の利用可能性の季節・地域変化について調査した。ヤマネコの糞内容物分析の結果、計 76 種の餌動物が検出され、これはネコ科では世界で最も多様化した餌メニューだった。主要な餌 19 種について、餌の利用可能性と捕食の頻度の季節性について分析した結果、共に季節変化がみとめられ、ヤマネコは餌の利用可能性に応じて主要な餌種を換えていることが示唆された。餌の利用可能性とヤマネコの食性の地域性について評価するため、地形・植生に関連した 9 要因についてセンサスで発見した餌種の場所とその餌種が含まれていた糞を採集した場所の周辺環境を調査した。その結果、餌種の生息場所と捕食は共に、周辺環境の影響を大きく受けており、両者に与える影響は類似していた。よって、ヤマネコは生息環境で豊富な餌を頻繁に捕食し、その餌条件の変化に応じて柔軟に主要な餌種が変化すると考えられる。

ヤマネコの環境利用について調査するため、環境の異なる 7 箇所の調査地で計 15 個体のラジオトラッキングによる個体追跡調査を行った。測位した個体位置の周辺環境は、地理情報システム (GIS) を用いて食性分析と同様の 9 要因で評価し、環境利用の季節・地域変化について分析した。その結果、すべての調査個体は選択的に環境を利用していたが、嗜好環境は季節的・調査地域で大きく変化した。こうした環境利用の変化には、季節・地域によって変化する餌の利用可能性が影響していると考えられ、それに伴ってヤマネコの環境利用、採餌様式も柔軟に変化するものと考えられる。

以上の結果から、イリオモテヤマネコは、時空間的に大きく変動する餌の利用可能性に応じて主要な餌種や採餌様式を変化させ、島中の環境に適応していると考えられる。また、こうした柔軟かつ多才な生態的特性は、ベンガルヤマネコが潜在的にもつものかもしれないが、西表島のような限定された環境でのみその形質が発現するものと考えられる。